

## 〈中学国語〉

# 主体的・対話的で深い学びのある国語科の授業をめざして — 交流方法の工夫を通して —

宜野湾市立嘉数中学校 教諭 新本 真紀子

## I テーマ設定の理由

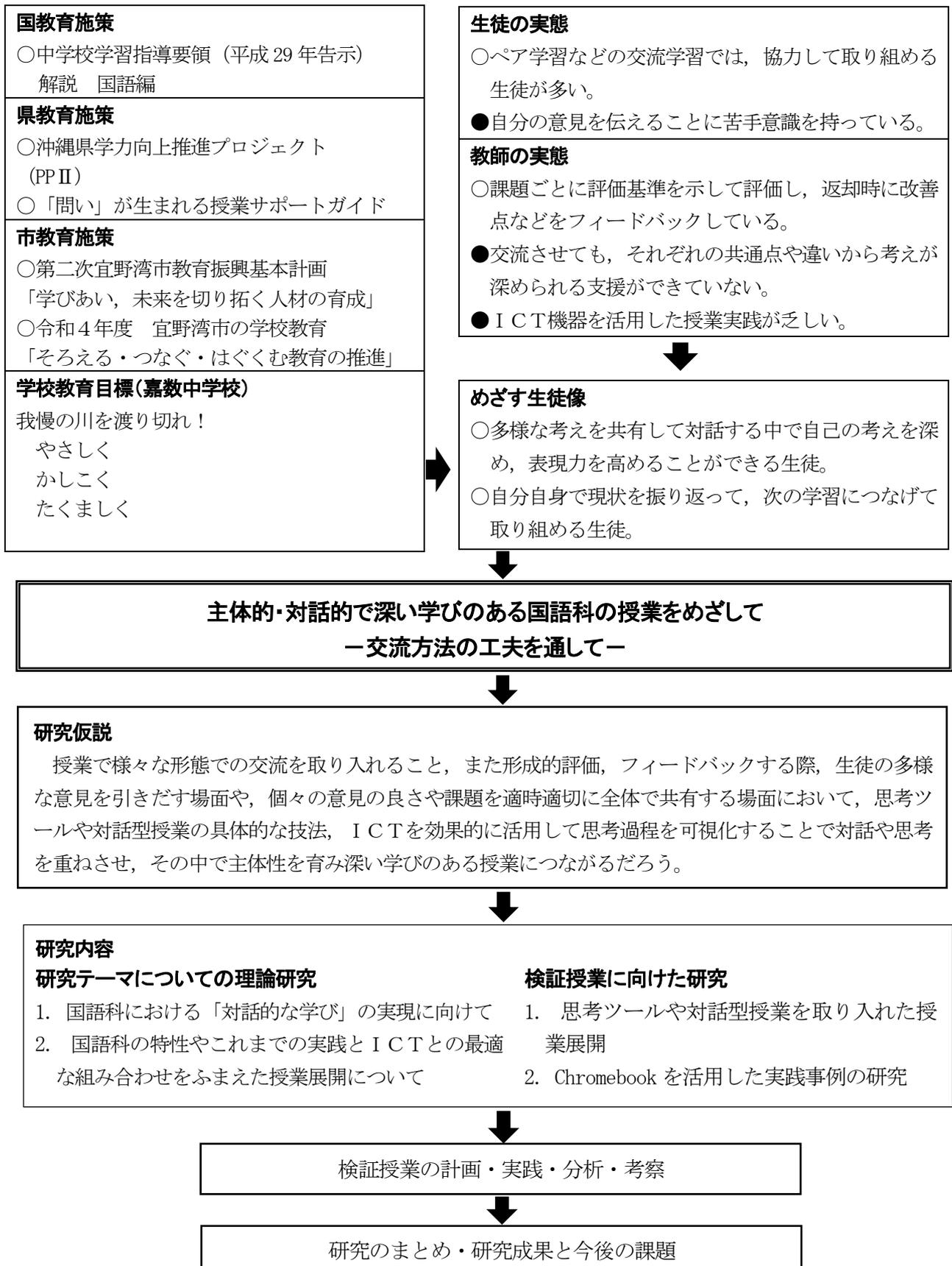
文部科学省（2018）「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編」（以下「学習指導要領解説国語編」）における国語科の目標は「（1）社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。（2）社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。（3）言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」と明記されている。これからの予測困難な時代に生きる生徒たちは、その中で社会生活を送るために必要な国語の資質・能力を「社会生活における人との関わりの中」で身につけることが求められている。

さらに学習指導要領解説国語編では国語科の評価の観点も五観点から三観点へと大きく変化し、新しい観点到合合わせた評価が示されている。その三つの「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の力を育てていくためには、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図っていくことが必要であると考え。具体的には、対話を取り入れた授業において生徒同士で多様な考えに触れさせることで自己の考えを深め、表現力を高めさせていきたい。また、評価方法を工夫することで、生徒自身が現状を振り返って次の学習につなげようとする主体的な態度を培ってきたい。

これまでの私自身の授業を振り返ると、交流活動を設定して自己の考えを発信させたり、評価方法ができるだけ具体的に示したりすることで、生徒が主体的に学習に取り組めるよう授業改善に取り組んできた。しかし、生徒たちの実態として、日常生活において親しい仲間同士での会話はできるが、授業では自分の意見を述べる程度にとどまり、他者の意見との共通点や相違点から新たな気づきを捉えるまでには至らず、深い学びにつながりにくいことが課題となっている。また、コロナ禍の影響として、一定の距離を保ち、マスクで顔の表情がわかりづらいことも人間関係の希薄化を促し、伝えることに苦手意識を感じていると考えられる。国語科の学習評価の面においても、意見文や感想文、課題作文など回収して教師が評価し、生徒に返却するまでに時間がかかってしまう。そのため、自分や他者の意見の良さや課題点について生徒のもとにフィードバックされたとしても、学習とその改善の間に学習での時間差もできてしまうため効果的に指導・学習改善に生かすことができていないと感じている。

これらの実情をふまえ、上述した諸課題の解決に取り組むための手立てとして、授業で様々な形態での交流を取り入れること、また形成的評価、フィードバックする際、生徒の多様な意見を引き出す場面や、個々の意見の良さや課題を適時適切に全体で共有する場面において、思考ツールや対話型授業の具体的な技法、ICTを効果的に活用して思考過程を可視化することで対話や思考を重ねさせ、その中で主体性を育み深い学びのある授業につながるだろうと考え、本テーマを設定した。

## II 研究構想図



### Ⅲ 研究内容

#### 1 国語科における「対話的な学び」の実現に向けて

##### (1) 国語科における「対話的な学び」の実現とは

「対話的な学び」について、中央教育審議会答申（平成28年12月）では、「子供同士の協働、教職員や地域の人の対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める『対話的な学び』が実現できているか。身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる」と示されている。対話の対象として、国語科においては作者の考え方に触れ自分の考えに生かすなども挙げられる。また、自分と他者の意見や考え方を比較することで新たなことに気づき、考えを広げたり深めたりできるようにすることも求められる。対話を通して自分の考えを形成し、共有していく過程で、身に付けさせたい力として、学習指導要領「A 話すこと・聞くこと」のうち「話し合うこと」の指導事項に、表1のように示されている。

**表1 中学校学習指導要領(平成29年告示) A 話すこと・聞くこと**

(中1) オ 話題や展開を捉えながら話し合い、互いの発言を結び付けて考えをまとめること。
(中2) オ 互いの立場や考えを尊重しながら話し合い、結論を導くために考えをまとめること。
(中3) オ 進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりしながら話し合い、合意形成に向けて考えを広げたり深めたりすること。

ただし授業の中で話し合いの場を設定することはよくあるが、意見を共有しただけでは深い学びまでには至らないことが課題として挙げられる。そこで、深い学びを実現するために、どのように話し合いの場を設定すればよいか、またそこでの具体的な指導方法について考えていきたい。

##### (2) 対話型授業とは

交流する場を設定するだけでは、自分の意見に自信のない生徒同士で意見が言えなかったり、特定の生徒の意見が中心になったりしてしまうなどの課題が見られる。その課題解決の方法として、三橋(2019)は「ペア・グループ学習を位置づけた対話型授業」を提案している。さらに、教師が意識を変革して授業改善するための視点として「5つの意識」を挙げ、それを取り入れた対話型授業の技法を提案している。三橋の主張をもとに、表2にその概要をまとめた。

**表2 「5つの意識」とそれを取り入れた「対話型授業」(三橋 2019を基に筆者作成)**

5つの意識	対話型授業	効果
【相手意識】 どうすれば相手に理解してもらえるかを考える。	スリーステップ法	繰り返し同じ問題に取り組み、失敗してもすぐに取り戻せる。また、わからなくても教えてもらうことができるようになったり、わかるまで質問したりしやすい。異なる相手と考えることができる。
【手段意識】 どのような説明をすれば、相手によりわかってもらえるかを考える。	エキスパート・ペア・シェア	ペア学習の前に、同じ意見の生徒をグループにして自分には味方がいると思わせることで、同調することを減少させることができる。また、他者にわかりやすく伝える方法を同じ意見の人と考えさせることで、自分と比較したり関連付けたりして意見が強化される。

【目的意識】 生徒が考えたいと 思う目的をもたせ る。	ADM法	問題の解答が導き出されたら終わりではなく、現実の世界と関連付けた問題として捉え直したり、さらに自ら課題を見つけて考えを深めたりする。
【評価意識】 対話した後、次の 対話までに評価さ せ、改善する機会 を与える。	B S I 法	前半後半に分けて説明するので全員が発表でき、話し合いに意欲的になる。また、発表者と聞き手の距離が近いので、すぐに質疑応答でき、聞き手も理解しやすくなる。発表者も聞き手の意見を基に自分の考えを深めたり、新たな視点を得たりすることもできる。
【方法意識】 課題の解決に見通 しを持たせる。	3 Q S	解答だけでなく、生徒自身が問題の解決に向けて話し合い、まとめ、表現した過程についても説明する。そのため、問題解決に過程においてうまくいかなかったとき、メタ認知的に俯瞰でき、再度チャレンジすることができる。

この中でも、今までの授業で取り組んできたペア学習やグループ学習が生かせるスリーステップ法を活用していきたい。三橋は、スリーステップ法を授業に取り入れることの良さを具体的に五つ挙げている。一つ目は、個人で考えたことを、次に横の人、その後で縦の人、グループ、最後に全体で伝え合うというように、伝える相手や状況を変えることによって、学びが深くなる点である。二つ目に、伝える内容がうまく伝わらない場合でも「こうすれば良かった」と反省し、次の機会にうまくいかなかったことを改善できる点である。三つ目に、わからないことがあっても仲間から教えてもらったことをもとに、次の機会に伝えることができる点である。また、自分がわからなかったぶん、わからない人の立場になって説明するので説明がわかりやすくなることもある。四つ目に、ペア学習から始めるので、わかるまで質問しやすい点である。最初からグループ学習だとわからなくてもわかるふりをしてしまう。しかし、他の人に説明しなければならないので、わからないときはわかるまで聞いておく必要がある。そのため積極的に質問しようという態度が養われるというのである。五つ目に、一人でわからないときは二人で考え、それでもわからないときはグループで考えることができ、同じ問題を異なる相手と三度考えることができる点である。三橋が提案したものは他にも取り入れたいものがあるが、まずは今までの実践の中で行ってきたことをもとに活用しやすいスリーステップ法を取り入れ検証していきたい。これまでの授業では、席の横の生徒のみの交流がほとんどだった。そのため、交流に十分な深まりが生まれなかったという課題がある。そこで、スリーステップ法の良さを生かせるよう、意識して取り組ませていきたいと考えている。

### (3) 思考スキルと思考ツール（シンキングツール）とは

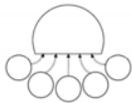
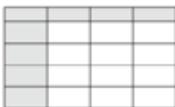
個人でも、交流の中でも、考えさせる場面を設定するだけでは、どんなふうを考えればいいのかかわからないまま時間が過ぎてしまう生徒がいる。こうした生徒を含め、思考力を育むにはどうすればよいのだろうか。この点を考えるうえで注目したのが、思考スキルと思考ツールである。考えることには「比較する、分類する、関係づける」などのパターンがあり、それらは「思考スキル」と呼ばれている。「思考スキル」について学習指導要領の分析から19種類に分類整理した泰山（2014）は、それらを表3のように示している。

表3 教科等横断的な思考スキルの一覧(泰山ほか 2014)

・多面的にみる	・変換する	・順序立てる	・比較する	・分類する
・変化をとらえる	・関係づける	・関連づける	・理由づける	・見通す
・抽象化する	・構造化する	・焦点化する	・評価する	・応用する
・推論する	・具体化する	・広げてみる	・要約する	

泰山によると「思考スキル」とは、「考えるために必要となる認知的な技能を『比較する、分類する』などのように具体的に捉えたもの」と定義されている。しかし、授業の中で、全員にこのスキルをすべて活用させられるわけではない。また、活用されているかどうかを見取ることも、学習に苦手意識を感じている生徒が思考スキルをうまく活用することも難しいと思われる。これらをふまえると、「思考スキルを活用している」ということを可視化する必要があると考える。そこで、効果的に思考ツールを用いることにより、思考力に差があっても思考スキルを高めていくことができるのではないかと考えた。思考スキルに合う思考ツールを「シンキングツール～考えることを教えたい～」(黒上ほか 2012)から抜粋し、表4のように示した。

表4 思考ツール(黒上ほか 2012)

思考スキル	思考ツール	使い方
理由づける 関係づける 要約する	クラゲチャート 	クラゲの頭の部分に自分の考え、答えなどを記入する。それらに対する根拠や原因などを足の部分に記入する。5本すべてに記入する必要はない。また、増やしてもよい。足の事項から頭の部分でまとめてもよい。
比較する 分類する	ベン図 	複数の事実、考え、意見などについて、共通点、相違点の両方をリストアップして整理する。
比較する 整理する 分類する	マトリクス 	行見出しに、整理する視点を記入する。列見出しに観点を書き入れる。(数に合わせて増減する)セルに数や名前、様子や状態を記入していく。セルとセルを見比べて、考えや意見をまとめる。
順番 関係 理由 同じ まとめ	矢印  囲み 	矢印と囲みを併用して使うこともできる。

泰山は、「思考ツール」を「頭の中にある多様な情報を特定の枠組みに沿って書き出すことで、『考える』ことを助けるための道具」と定義している。たとえば「理由づける」とときにはクラゲチャート、「比較する」ときはベン図というように、頭の中にある情報を思考ツールの枠組みに沿って書き出すことで思考スキルの発揮を支援してくれるというのである。また、「思考ツールは考える途中段階を補助する道具でもあるため、ツールに整理したら、それを見ながら考えることが必要である」「思考ツールに情報を書き出して考えを整理し、それを共有することによって、思考結果だけでなく、どのように考えたか、どのような情報を持っているか、というような思考過程も共有することができる。それによって『同じ情報を持っているけれど解釈の仕方が違う』『意見は同じだけれど、その理由は違う』といった内容についても共有することができ、学びを深めることが可能になる」と述べている。学習ツールが完成して授

業が終わるのではなく、クラゲチャートなら理由づけをもとに、自分の意見をまとめたりする活動、ベン図ならその違いや共通点からわかることを整理することが必要になるというのである。これらのことから、授業で考えたり、交流したりする場面で、でてきた意見を思考ツールに沿って考えさせることで、互いの考えの根拠や過程を教師だけでなく、生徒同士もすぐに見取り、フィードバックすることができるため、話し合いがスムーズになり、活発になると考えられる。今までの授業では、ワークシートで考えた結果だけが可視化されたが、思考ツールを活用すると、途中の考えも可視化され、思考ツールをもとに考えることができるようになり、新たな気づきや問いが生まれてくるだろうと思われる。思考ツールの一つであるクラゲチャートは、理由づけることを助け、主張の根拠を考える場面で役立つ学習ツールである。しかも、これから授業で使い始めていくことをふまえると、多くの説明をしなくてもわかりやすく慣れやすい、また、多様な意見から主張に迫っていく思考ツールとして活用の幅が広いだろうと考える。そこで、Chromebook と併用して思考を深めていく場面でクラゲチャートを使っていきたい。図1はクラゲチャートの活用例である。

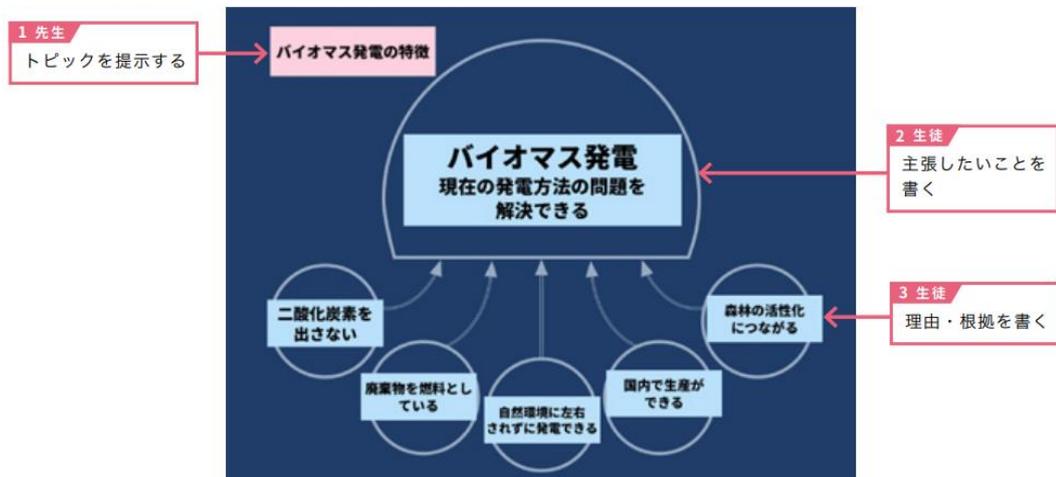


図1 「クラゲチャート 理由付ける」(黒上 2021)

## 2 国語科の特性やこれまでの実践とICTとの最適な組み合わせをふまえた授業展開

学習指導要領において、「生徒がコンピュータや情報通信ネットワークを積極的に活用する機会を設けるなどして、指導の効果を高めるよう工夫すること」と示されているように、ICTはあくまでも手段であり、活用に当たっては、育成を目指す資質・能力との関連を明確にすることが重要だとされている。また、文部科学省は、「国語科の指導におけるICTの活用について」の中で国語科における具体的なICTの活用場面を「情報を収集して整理する」「自分の考えを深める」「自分の意見を表現、共有する」「知識や技能を習得する」「学習の見通しや蓄積を重ねる」と想定している。

授業でのChromebookの効果的な活用方法を考えていくにあたり、石丸憲一(2022)は『Chromebookでつくる中学校国語の授業』で「特に、これまでうまくいっていなかった活動について、Chromebookに置き換えることで生徒のもつ可能性を引き出すことにつながるだろう」と述べている。また、その「うまくいっていない点」について具体的に「生徒にうまく考えをもたせられない。生徒がよい考えをもっている、表現できない。生徒から考えをうまく引き出してやれない。生徒の話し合いが長続きしない。わかっている生徒とそうでない生徒の差が大きい」といった課題を挙げている。さらに石丸は、それを変えるきっかけとしてChromebookを取り上げ、三つことがで

きるようになるというのである。以下に示す表5では、石丸の主張をもとに Chromebook や、それに付随するアプリを活用することによって可能になることをまとめたものである。

**表5(石丸 2022 を基に筆者作成)**

国語科における課題改善の視点	授業の課題と Chromebook でできること
見えないものを見えるようにする	今までの交流のさせ方だと他の生徒の考えていることを部分的に知ることはできる。しかし、Chromebook を使うことで一瞬にして学級内のすべての生徒の考えを一覧にし、それを閲覧できる。
表現できないことをできるようにする	発問した後で、「まず自分の考えをノートに書いてみましょう」という指示を出すことは多いが、自分の思っていることを表現できずに終わる生徒も存在する。数分後には公開しなければならない場面を全員に設定できるため、なかなか書き始められない生徒の書こうという気持ちを高めることができる。また、活字、付箋などの電子媒体の要素の方が紙媒体よりも取り組みやすくなる。そうして書くようになることで、見てもらうのが楽しくなり、積極的に書くようになる。
わかりにくいことをわかりやすくする	生徒に活発な話し合いをさせたいと考えているがなかなかできず、結局考えを出し合って話し合いが終わりになる。それは、出された考えを分析できていないからだ。Jamboard で生徒の考えを一覧にし、それをグループで共有し、分類したり、比較したりすることを協働という形で行うと、少しずつ考えを分析し、それをさらに高めていくことができるようになる。

また、Chromebook の特徴としてアプリが豊富であるが、国語の授業に活かしやすい機能を表6にまとめてみた。

**表6 (石丸 2022 を基に筆者作成)**

アプリ	国語科の授業における活用方法
Classroom	課題提示や提出された課題の管理機能を授業に活かすことが考えられる。Jamboard や Google フォームは短めの反応を出させて、それを集約、分析することを得意としているが、classroom では、長文を提出させて、それを共有し、互いに評価し合ったりコメントし合ったりすることができる。
Jamboard	授業で生徒の考えを交流したり、それをもとに話し合いを展開したりすることを考えたときに、考えたことを付箋に書いて張り付けていくものである。張り付ける前にさらにスケールなどを背景としておき、自分の考えがどこに位置するかを考えさせることでメタ認知を促すことができる。また、思考ツールを活用して、分類させたり考えさせたりすることもできるようになる。
フォーム	生徒の考えをアンケート調査形式で簡単に収集し整理し分析できる。単元に入る前に事前アンケートをして実態をつかんだり、授業中に考えの散らばりを把握したり、授業終わりに振り返りをしたりするツールとしても有効である。生徒側からの利用を考えると、生徒自身が他の生徒の考えをアンケートとして調べるための簡単な方法として使うことができる。

表6で示したアプリの機能だけでなく、それ以外の Chromebook やアプリの特性をふまえ、これまでの授業実践のどの学習活動で活用すれば効果が得られるのかを検討する必要がある。そこで、これまでの授業のどの学習活動で、どのような活用ができるのか、石丸（2022）と『国語教育』編集部（2021）を基に筆者で表7にまとめた。

**表7 学習活動と Chromebook の機能の活用例(石丸 2022 と『国語教育』編集部 2021 を基に筆者作成)**

学習活動	Chromebook の機能の活用例
アイデアを出す	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイデアを付箋やテキストボックスを使いボードに貼っていく。</li> <li>・シートにアイデアを同時に書き込みする。</li> <li>・アンケート形式でアイデアを出し合う。</li> </ul>
調べる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマについて検索し、事実確認や識者の意見を参考にできる。また、辞典を利用し、語彙や表現の幅を広げることができる。</li> </ul>
考えを深める 情報を整理する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Jamboardの背景に、授業展開に合わせた画像を使うことで学習活動を広げることができる。たとえば思考ツールを活用することによって付箋のアイデアを可視化でき、集めた情報を比較したり、線を書き込みながら分類・関連づけて構造化したりできる。</li> </ul>
学びを共有する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終的な成果物のみならず途中のものもデータで共有できる。また、座席の距離にかかわらず他の生徒の作品を手元で確認し、アドバイスを送り合うことができる。</li> <li>・Jamboardを使えば、付箋紙のように移動させて同じ意見をまとめたり、種類ごとに色を変えたりして整理できる。</li> <li>・フォームを使えば自由に記述した文章がスプレッドシートに集まり、誰がどのような意見をもっているのか一覧にして見ることができるので、それを見ながら交流を促すことができる。</li> </ul>
文章を書く	<ul style="list-style-type: none"> <li>入力した文章に加筆、削除、入れ替えなどの修正が簡単にできる。</li> </ul>

ここまで、石丸の書籍をもとに Chromebook の活用方法を確認してきた。これまでの授業で行ってきた、ワークシートに書かせるなどの従来の取り組みせ方と Chromebook をどう組み合わせれば学びの定着や蓄積がスムーズになるのかも含めて検討したい。Chromebook を使う前提として、生徒のタイピングの能力などの個人差にどう対応していくかという課題もある。また、個人で考えを広げる場面、交流する場面での Chromebook の活用に、思考ツールや対話型授業との組み合わせも考えていきたい。思考ツールを活用することで、思考スキルを高めるための具体的な指導を探っていきたい。そのために、何をどのように考えさせたいかを意識し、Chromebook や板書など、どの思考ツールを、どの場面で選べばいいかを考えていきたい。そして、生徒の多様な意見を引き出す場面や、個々の意見の良さや課題を適時適切に全体で共有する場面において、思考ツールや対話型授業の具体的な技法、ICTを効果的に活用して思考過程を可視化することで対話や思考を重ねさせ、その中で主体性を育み深い学びのある授業につなげていきたい。ただし、Chromebook、思考ツールや対話型授業の技法も、指導する立場の私自身、すぐに身につくものではない。他の先生方とどのようなやり方が効果的なのか相談しながら、研究後の授業にもつながるよう検証授業に取り組んでいきたい。

## IV 検証授業

# 第1学年国語科学習指導案

令和4年12月19日(月)3校時

嘉数中学校1年1組(男15人・女15人計30人)

[1年2・3・7組同様]

授業者 新本 真紀子

指導助言者 高瀬 裕人

### 1 単元名 9 振り返って見つめる(教材名「少年の日の思い出」)

### 2 単元の目標

- (1) 場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写をもとに捉えることができる。[思考力・判断力・表現] C読むことイ
- (2) 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができる。[思考力・判断力・表現] C読むことエ
- (3) 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解することができる。[知識及び技能] (2)ア

### 3 単元について

#### (1) 教材観

本教材の中で描かれている、クジャクヤママユに対する欲望に逆らえなかった「僕」の心情は、自分の夢中になっているものを考えさせることで生徒には理解しやすいものと思われる。それとは反対に、謝罪を受け入れず、常に正しく冷静なエーミールの態度に、生徒は「僕」と同じように反感を持つことが予想される。そこで、視点を変えて物語を捉え直すことで、他者との関わりや心情の変化を読み取り、深い学びにつなげていきたい。「僕」とエーミールは、性格も考え方もまったく異なるが、チョウの収集をしているという共通点をもっていたためお互いの距離が近づいていく。その異なる価値観はチョウの収集へも影響し、珍しい技術を持っていたり、手入れが正確だったりエーミールを認めている「僕」に対して、「僕」が自信を持って見せた「珍しい青いコムラサキ」はエーミールから「こっぴどい批評」を受けてしまう。また、謝罪しても壊れたものは戻らないということを理解しているエーミールと、そうではない「僕」とのそれぞれの価値観の違いに気づかせていきたい。

#### (2) 生徒観

##### ① 教材に対する生徒観

生徒たちは、「字のない葉書」の授業において父親の立場でリライトしている。その授業を振り返ることにより、エーミールの視点で僕の行動を考える場面においてエーミールの気持ちを捉えやすくなると思われる。そこで「僕」の視点からエーミールの視点で物語を捉え直し、さらに自分の大切なものを壊された場合として考えさせることでエーミールの考えに共感しやすくなるだろう。

##### ② 生徒の実態

授業では、全体的に女子がおとなしく、あいさつなどもなかなか声が出ず、わかってはいるがなかなか発言までには至らない。数名の男子の発言で授業が展開されていくことが多い。交流するときには自分の意見を伝えることはできる。授業では、正解することではなく、まずは

自分の意見を持ち書くことを大切にするよう指導している。検証授業前のアンケートの「話し合う活動を通して、自分の意見を伝えることができているか」では、「できている」が 37%、「どちらかといえばできている」40%で 77%ができていると答えてはいる。しかし、「どちらかといえばできている」と答えている生徒の中にも「できている時とできていない時がある」「聞かれたら自分の答えを伝えている」「積極的に言っていない」「勇気がない」など自分の意見を伝えることに消極的な意見が見られ、交流が活発になるよう工夫する必要がある。

### (3) 指導観

第1時で生徒の疑問から課題を考えさせ、その中から出てくることが予想される「なぜチョウを潰したのか」を第6時で考えさせていきたい。そのために、二人の人物像やお互いにどう思っているか、また、エーミールの視点で場面を考え、捉え直すことで「僕」の視点で描かれているエーミール像であることに気づかせたい。エーミールに対する思い、「僕」自身に対する思いについて様々な意見を引き出しながら、チョウを潰した「僕」の心情に迫っていきたい。また、交流する時にスリーステップ法を取り入れ、横と縦のペアの交流、それからグループ、全体へとつなげ、交流する数を意図的に増やすことで意見交換をしやすくしていきたい。また、Chromebook の Jamboard で交流する際、思考ツールを用いることで思考を可視化し、比較したり、まとめたりしやすくなるよう支援していきたい。

## 4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
心情を表す語句や、描写を捉えている。	場面ごとに「僕」の心情を読み取り、その変化を捉えている。	登場人物の心情を捉え、他者と比較しながら自分の考えをまとめようとしている。

## 5 単元の指導計画・評価計画（7時間設定）

時	めあて	学習活動	評価基準と評価方法
1	○語彙に注意して読み物語の大きな内容を捉える。	・大まかな内容を捉え、疑問を中心に初発の感想をまとめる。	【知識】 わからない語句に線を引いたり、調べたりしている。 【思考・判断・表現（読む）】 本文の叙述に対して疑問を書いている。（ワークシート）
2	○初発の感想から学習課題を考える。	・初発の感想から疑問を出し合い、課題を考える。 ・登場人物を確認し、前半と後半の共通人物を押さえる。	【思考・判断・表現（読む）】 現在と過去の場面で共通している人物を押さえる。（Jamboard の付箋・ワークシート）
3	○人物相互の関係を捉える。	・二人の人物像、お互いをどう思っているかを捉える。 ・なぜ「僕」がエーミールを嘆賞し、憎んだのかを考える。	【思考・判断・表現（読む）】 二人の特徴を挙げ、対比しながら、両者の対照的な面を捉えている。（ワークシート）

4	○僕がエーミールにしたことを、エーミールの視点から考える。	・「僕」の行動をエーミールの視点から考える。(コムラサキを見せる, 壊れたクジャクヤママユ, 告白, 喉笛に飛びかかる)	【思考・判断・表現(読む)】 エーミールの視点で「僕」の行動を考えている。(ワークシート)
5	○僕がエーミールにしたことを、エーミールの視点から考える。	・エーミールの人物像を再考する。	【思考・判断・表現(読む)】 「僕」の視点でマイナスに書かれていることに気づき、エーミールの人物像を新たに捉えている。(ワークシート)
<b>本時</b>	○チョウを潰した理由を捉える。	・「僕」がどの指でチョウを潰したのかを考える。 ・チョウを潰した「僕」の心情を捉える。	【思考・判断・表現(読む)】 「幼い自分」に決別する「僕」の心情を捉えている(Jamboardの付箋・ワークシート)
7	○エーミールの視点で謝罪の場면을リライトする。	・前時までに学んだことや条件を押さえ、エーミールの視点でリライトする。 ・交流で読み合いながら、完成させていく。(共通点・相違点)	【思考・判断・表現(読む)】 ・謝罪の場면을エーミールの視点で書いている。(ワークシート) 【主体的に取り組む態度】 ・互いの作品を読み、生かそうとしている。(ワークシート)

## 6 本時の指導 (6 / 7時間)

(1) ねらい チョウを潰す描写やエーミールの視点を押さえ、チョウを潰した理由を考える。

### (2) 本時の評価基準

評価の観点	【思考・判断・表現】C読むこと イ
評価基準	「僕」と「エーミール」の人物像について理解し、対照的な人物像や「もう償うことができない」という叙述をふまえ、チョウを潰した僕の心情を捉えている。
評価方法	授業内：Jamboardの付箋 発表 ワークシート 授業後：ワークシート

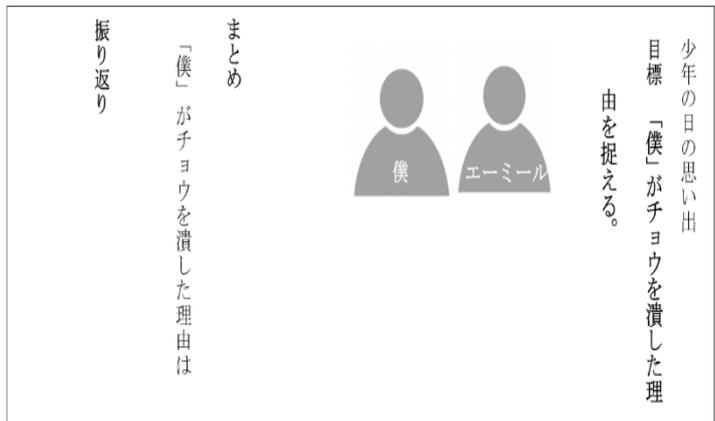
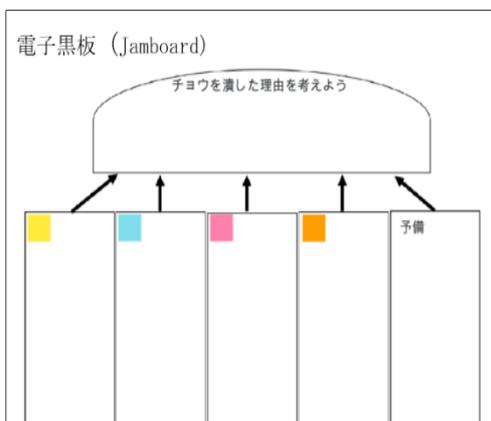
### (3) 「めざす子どもの姿」の実現に向けた授業改善(教材・発問・問い返し・過程工夫等)

場面	工夫点(発問等)	子どもの姿
<b>主体的に「問い」をもち、自分なりの考えをもつ</b>		
(導入) 本時の目標を確認する場面	第1時の初発の感想の交流で一番多かった疑問を確認する。	自分たちの疑問を解くために協力して取り組もうとしている。
<b>他者との交流を通し、「問い」が生まれ自分の考えを広げ深める</b>		
(展開) チョウを潰した理由を考える場面	グループで交流する際、思考ツールやJamboardを活用する。	お互いの意見が可視化でき、意見交換がしやすくなっている。
<b>学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもつ</b>		
(まとめ) 本時の振り返りの場面	自分の最初の意見と比較させる。	共通部分や相違点、新たな気づきや疑問点を持っている。

(4) 展開

過程	学習活動・内容・発問等	予想される生徒の反応	指導上の留意点, 評価等
導入 3分	①前時の復習をする。	・前時のエーメールの人物像 (冷静, そんなに嫌なやつではない, 正直, 大人)	・「僕」視点で描かれていることを押さえる。
展開 42分	②目標を確認する。	目標 「僕」がチョコを潰した理由を捉える。	
	③課題を確認する。	課題 なぜ「僕」はあれほど好きなチョコを潰したのか。	
	④本文を読んだ後, どんなふうに潰したかを具体的に考える。 ⑤チョコを潰した理由を考える。 ⑥ペアで交流 (横→縦) ⑦グループ学習 (グループの確認→付箋に入力→グループで意見をまとめる→全体で交流) ⑧チョコを潰した描写やエーメールの視点を押さえ, チョコを潰した理由をまとめる。	・手のひら, 親指, 薬指と親指, 人差し指  ・罪悪感, エーメールへの償い, チョウ集めをやめるため, 思い出したくない  ・一つ一つ, こなごなに ・謝罪, 償い, もう見たくない, 思い出したくない	・「僕」の行動を具体的に押さえてから心情を考えさせていく。 ・書けない生徒がいても, 時間は延長せず, 交流の中で考えさせていく。 ・スリーステップ法 (横→縦→グループ→全体) ・クラゲチャート (思考ツール) や Jamboard の活用  【思考・判断・表現】Cイ対照的な二人の人物像, 「償いのできない」を押さえ, 幼い自分への決別を捉えている。
振り返り 5分	⑨[振り返り]本時の振り返りを書く。	・「目標」に対して本時の学習を振り返って書いている。	・目標に対し, できたことや課題, 新たな気づきや疑問を書くよう伝える。

7 板書計画 (電子黒板)



## 8 検証授業研究会 (○良かった点 ●改善点)

### (1) 授業者の反省

○わかりやすいクラゲチャートを第1時でも使っていたので、生徒の操作はスムーズだった。

●他のクラスは授業が連続していて前時の流れとつなげてスムーズに展開したが、1組は前時と空いて、生徒もそうだが、私自身もうまく流れを作れなかった。

●電子黒板を使い全体でグループの意見を共有するとき、意見が長いと読むのに時間がかかり、どこまで拾えばいいかなど見取りが難しく、フィードバックのしかたを工夫する必要がある。

●グループ交流では、タブレットですでに意見が出ているが、話し合いにすぐに入れず戸惑いが見られた。不慣れなタブレットでの話し合いの流れを作るための手立てが必要である。

### (2) 意見及び感想

○机間指導で「なるほど」「いいね」「そうなんだ」など子どもたちへの声かけがよかった。グループ・ペア学習の時に、発言しやすい雰囲気だと感じた。

○時間を区切ったり形態を変えたりして伝え合うことで、ないものを見つけたり、同じ意見だと安心したりして学習していた。「なぜ」と先生が個人、全体に問いかけてさらに深めていた。

○グループ学習で「わからない」と投げやりな生徒に「意見はいい、あとは理由だね」とアドバイスしたり、書けていない生徒に「書けている人に自分の意見を言ってあげてね」と声かけしたりしていたのは、次の学習につながると思った。

●教師の説明が多いので、「どう思う」という簡単な問いかけで考えさせるなど、伝えないといけないことをコンパクトな言葉でつなげられたら授業もスムーズに行くのではないかな。

●時間オーバーしたのはもったいなかった。まとめで(模範解答を)写させたが必要なかったのではないかな。あれだけ考えていたので、キーワードで書けたのではないかな。

### (3) 指導助言(琉球大学教育学部 高瀬 裕人氏) (以下「高瀬氏」)

○思考ツールは国語用の「バタフライ」を使おうかと相談していたが、慣れの問題もあるので今日の生徒たちはクラゲチャートでよかった。

●クラゲチャートを使うときに、どういう思考を働かせたいのか、焦点化させる声かけがあってもよかった。書くのはできたが、そこから分類・整理する思考になったときに戸惑っていた。先生が最初の指示で「どれが一番グループの意見になるか整理してごらん」という声かけをした。そうなる集めたものから一つを選ぶ思考だが、子ども達は、分類してこんな意見もこんな意見もある、という形だった。そこを意図とどうずれていたのか考えた方がいい。

○Jamboardは、動かす作業ができるので効果的だった。「わからない」と言っていた生徒のグループは他のグループを見始めた。これがICTを使う一番のメリットだと思う。今までなら困ったときは立ち上がって見に行くという方法しかなかったが、手元で他のグループがどう進めているか確認できた。タブレットの意見交換はグループ内なのか、それとも他のグループも見ながら交換していくのか、どういう交換が行われているのかを分析していくといい。

○クラゲチャートを全体共有する際、全部の意見を見て時間内に終わるかと思ったが、あれをふまえて最後に意見を書いてよかった。最初にクラゲチャートを書いた時とどう変わったか、どこまで深まっているのか分析すると今回使ったツールの効果が明らかになってくる。

●交流のさせ方で、横と縦でできるだけ多く取り入れ、さらに全体という流れで、言えない子をどんどん出してあげるという形だった。その時間配分で一分は短すぎた。意見を言うことはできるが交流や質問はできない。ある生徒は、言っておしまい、その手立てを手に入れる

ことができなかつた。取り入れ方を工夫するとおもしろくなると思う。

- タブレットモードにして画面で打ち込んだり、キーボードで打ち込んだりする生徒もいて、ICTへの慣れの差を考える必要がある。操作が難しい生徒は付箋を読んで終わりになってしまい、だんだん付箋しか見なくなつたが、国語なので本文に戻ってほしい。先生が「戻りなさい」と言つたので戻り始めた。授業の中でどう使っていくのか考えた時に、今日は意見だけを書かせたが、どこが根拠かページ数と行数だけでも書かせる癖をつけさせていくとさらに力がついていくだろうと思う。今日のクラゲチャートやワークシートの記述を併せて分析し、子どもたちの意見がどれくらい変わっているか、国語的に見た時にどんな深まりを読み解けるかをまとめていくと、クラゲチャートを使った意味やこういう寄せ方をした意味がはっきりすると思う。

#### (4) 意見交流

授業者：グループを超えて交流させていくときに、どういう声かけをすればいいのか。横、縦ペアで交流するとき、他のクラスでは長くて待っている生徒が多かつたので20秒程度で区切つた。横縦区切らずに交流した方が流れを区切らずにいいのではないかという助言もあつたが、意図的に設定しないと多くの人と交流できないので設定は必要かなと思う。

高瀬氏：付箋に書いて分類し共有して終わりとなつていたので、「付箋を書き足す」という作業をさせる。Jamboardは線が引けるので、友達の意見を聞いてなるほどと思つたところにタッチペンを導入して線を引かせ、自分の発見をどんどん書き込ませる。ただし聞くだけでなく、「ここは一緒だね」と先生がやつたことを子ども達同士でできるようにすることで、最後の全体交流では子どもたちが自信をもって「ここここは一緒だったからこういうふう」にまとめた。「ここは違う意見。でも捨てがたい」と書けるようになる。

授業者：第1時の疑問を出し合う授業で、新しい意見を付箋に打たせたら、他のクラスで時間がかかつたのであえて言わなかつた。

高瀬氏：キーボードで打つだけでなく、ハイブリット化した方がいい。書くとか、矢印でつなぐとか。普段はワークシートでやることをタブレット上でできるようにすると、意見がどう変わっているか記録も残る。付箋に書いたものに、他の意見をどう捉えて気づいていったかタッチペンで書き込んだものに表れてくる。そういう環境を作り、使い慣れるようにする。

授業者：共有するとき教師がキーワードを見つけたのを、子どもたちができるように「比較して」という指示が必要だつた。

高瀬氏：「どこが似ているのか、重なるのか自分たちで分類しなさい」と言つてあげると、子どもたちは自分たちでやっていく。

授業者：「同じワードに着目してまとめて、違つたら分けて」など具体的な指示が必要だつた。「他のグループを参考に見てもいい」と指示したら同じような意見になってしまうのか。

高瀬氏：長く時間をとると意見を出し尽くしてそうなるが、グループの意見をまとめるのを五分内に設定することで全部一緒にはならないし、他のグループはこう書いているけど、自分たちはこうしたという意見の表明のしかたにつながる。

授業者：ある生徒の「嫉妬」という言葉を拾ひかつたがうまくできなかつた。

高瀬氏：クラゲチャートが、共通項を見つける思考ツールになつてしまつたので、共通してないと消されてしまうという善し悪しがある。「嫉妬」をグループの人が聞くような声かけをどう用意するか。いろんな意見があり、それを削っていくという話をしてあげる。先生が個々に受容、共感的に声かけしていることを子ども同士ができるよう育てているので、クラスの友達

同士も共感的に聞いていた。ある生徒が「わからない」といった時、友達に自分で調べるよう言われ調べ始めていたが、彼女の学びは一つの意見に絞った時に見えなくなってしまった。彼女の学びをどう生かすかは今後も考えていってほしい。

授業者：第1時で初発の感想から課題を考えさせときは「少なくともいい意見なら選んでいい」と指示したのに今回はしなかった。付箋の書き方も、「一枚に一つ」がいいのか、「まとめて一文」に書いた方がいいのか。思考ツールもバタフライにして中央に「なぜチョウを潰したのか」として一枚に理由と根拠を書かせようかと考えたが、五人グループに対応できず、子どもたちもすぐに使えるかどうか。思考ツールも検討する必要性を感じた。

高瀬氏：普段は自分だけのワークシートに書いているだけなのが、クラゲチャートで一覧できる、そこから共通性を見出す力をどれくらい深めるかということと、国語の教師ならここを考えてほしいというところを多数決にしないような場をどう作るか。

授業者：ある生徒の「嫉妬」や「エーミールに対する苛立ち」とかの意見がもっと上がってきたらより答えに近づけたのに、ふるいにかけられてしまった。

高瀬氏：「嫉妬」とか「苛立ち」があるからこそ一つ一つ粉々に潰していく。単純なあきらめとかではなく、複雑なものを複雑なままだう捉えさせるか。それを一人でできないからこそ、みんなでいろんな意見を合わせたらどうなるだろうと考えていくことができる。

授業者：今までなら授業後のワークシートでしか気づけなかったものが、授業中に見られるようになった。ただし、クラスで反応に差があり、2組はすぐに交流したが1組はそうでもなかった。教師が「同じものをまとめなさい」以外の具体的な指示をもっと持つことが必要。

高瀬氏：通過点と見て使い慣れ、本当に深める時に使えるかということを検討していくことが大事。子ども達がタブレットに慣れるのは早い。逆に教師側がどれだけ追いつけるか試されている。今日は先生が全部説明したのを、生徒を前に出させ何が一緒なのか説明させてもよかった。

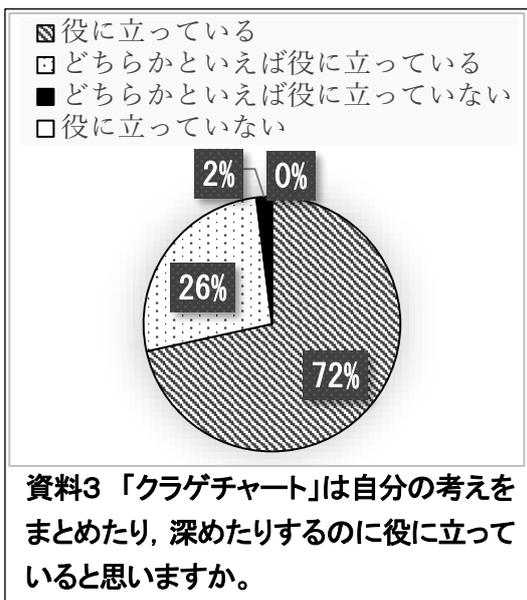
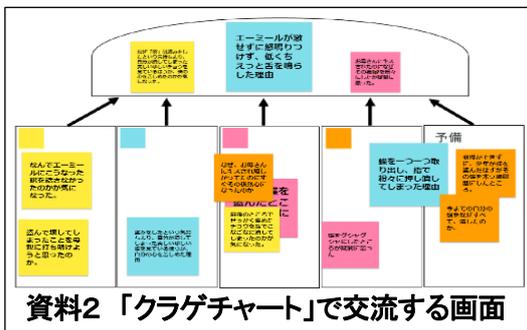
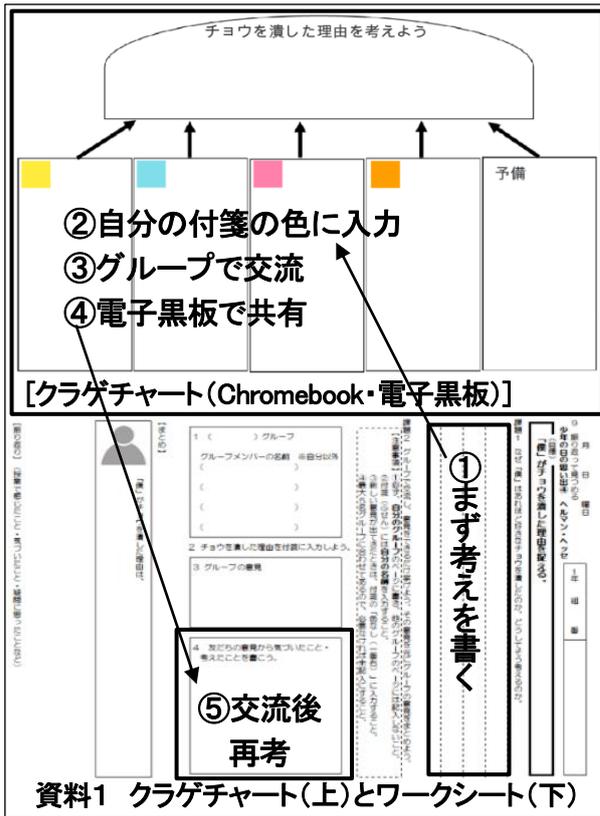
授業者：同じ意見の生徒が複数画面上にいて、誰に発表させるか戸惑った。グループになった時には意見が出ている状態なのに話し合いが始まらず戸惑っていた。司会などが必要なのか。

高瀬氏：出なければ役割は決めた方がいい。役割をだんだん離して、自分たちで決めさせることも、中学校三年間を見通して育てることが必要。今日は子ども達が緊張していたと思う。

## V 仮説の検証

授業で様々な形態での交流を取り入れること、また形成的評価、フィードバックする際、生徒の多様な意見を引き出す場面や、個々の意見の良さや課題を適時適切に全体で共有する場面において、思考ツールや対話型授業の具体的な技法、ICTを効果的に活用して思考過程を可視化することで対話や思考を重ねさせ、その中で主体性を育み深い学びのある授業につながるだろう。

本研究では、研究テーマを「主体的・対話的で深い学びのある国語科の授業をめざして—交流方法の工夫を通して—」と設定し、思考ツール（クラゲチャート）や対話型授業（スリーステップ法）、Chromebookを活用しながら、国語科における「対話的な学び」の実現や、国語科の特性とこれまでの実践とICTとの最適な組み合わせをふまえた授業を目指し研究を行ってきた。検証授業は7時間×4クラスの28間実施し、その中の6時間目の内容を本時の指導案としてまとめた。検証の視点となるワークシートの記述や事前・事後アンケートの結果を活用し検証を行った。



## 1 思考ツールを活用した学習の検証

個人で考えた意見を交流する場面では、Chromebook を活用して意見を出させるだけでなく、思考ツールを活用することで「比較・分類する」思考スキルが視覚化され、対話がしやすくなるだろうと考えた。思考ツールは、人物の気持ちを推し量る課題で根拠をふまえて自分の意見をまとめる過程に合致しやすく、いろいろな場面で使いやすいクラゲチャートを活用した。資料1のようにクラゲチャートの足部分は生徒が意見を出していく付箋の形に合わせて四角に、数はグループの最大人数の五つとし、付箋の色とセットにしておくことで、グループ内での個人の付箋の色を決め、誰の考えかわかりやすくした。また、多様な意見を出し合ってから主張に迫っていきけるよう、矢印を上向きにして作成した。すぐに Chromebook に入力するのではなく、資料1に示したように、これまでの授業実践と同様、ワークシートに「①まず自分の考えを書く」ことで、操作の個人差が

影響しないようにした。それを Chromebook の「②自分の付箋の色に入力」した後、③グループ、④全体交流を行った後でワークシートに戻り、個で「⑤再考」した。資料2は第1時でクラゲチャートを使い、グループで交流している画面である。付箋を動かし、同じ意見をまとめていた。第1時でもクラゲチャートを使い同様の流れで授業を行っていたため、思考ツールに慣れ、スムーズに取り組んでいた。

資料3の検証授業後のアンケート「『クラゲチャート』は自分の考えをまとめたり、深めたりするのに役に立っていると思いますか」では、「役に立っている」72%「どちらかといえば役に立っている」26%となり、初めて授業で取り入れたが肯定的な意見が98%と高い結果となった。「同じ意見をまとめたり、違う意見をみんなで考えたりしやすかった」「付箋を何枚かに分け簡単にまとめられた」「意見交流が早くできた」など効果を実感する回答が多かった。研究授業を行った1年1組の第1時の授業では、「新しい発見、気づきがあってもよかった」「自分が見つけられない疑問を改めて考えることができた」などの気づきや、「疑問に思ったことを解決したい」「なぞが解けるように何回も読み返そ

うと思った」など次につなげようとする振り返りの記述が見られた。また第6時の「チョウを潰した理由」について考える授業では、最初に最も多かった「償い」7名が交流後のまとめでは2名に、逆に「罪悪感」は3名だったのが10名に増え、「嫉妬」や「僕を認めてくれないエーミールにいらついでチョウにぶつけた」などの少数派の意見は拾われなかった。せっかく出てきた意見が、本授業のクラゲチャートの使い方では絞られていく過程で削除されていく結果となり、多様な意見から深めていくことができなかった。授業のまとめでは「あんな言い方をされてどうでもよくなった」という本文から外れた意見も2名いて、思考ツールや本文を根拠として押さえさせる場面をどう設定するか検討が必要である。ただし、授業後の振り返りには「友達の意見を聞いて考えが広がった、理解が深まった」「新しい考えが出た、改めて考えることができた」など肯定的な意見が学級の半数近くに見られた。

思考ツールの取り入れ方として、現在の場面と過去の場面での共通人物や二人の共通点を考えるときにはベン図、二人の行動を比較しながらエーミールの気持ちを考えるときにはマトリクスを意識して、ワークシートや板書に活用することで思考が視覚化できるよう工夫した。

## 2 対話型授業の具体的な技法を活用した学習の検証



写真1 縦のペアの交流の様子



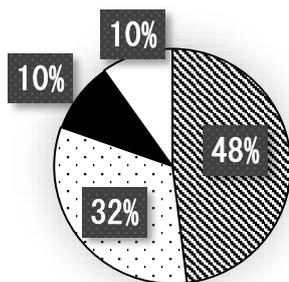
写真2 グループ交流の様子

対話型授業の具体的な技法の中から、ペア学習を中心に組みこんでいたこれまで授業の実態に合わせ、スリーステップを取り入れた。交流する際「横で」「縦で」という短い指示で時間を区切っていただけなので、生

徒もスムーズに取り組んでいた。欠席生徒がいるときは座席を配慮し、特に縦のペア交流は三人で行うなど、教科担当が環境を整える必要がある。

資料4の検証授業後のアンケートでは「伝えやすい」が48%で最も高く、「意見が違ふと『なるほど』と納得してくれ安心して伝えやすかった」「自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いたりすることで自信が持て、いろいろ伝えられるようになった」「話し合いがスムーズになった」など意欲的な意見が見られた。ついで「どちらかといえば伝えやすい」は32%となり、「だんだん慣れ緊張感がなくなった」「大勢の前ではないから話しやすい」「気まずい雰囲気にならなくなった」と苦手意識が軽減されている記述が見られ「伝えやすくなった」と合わせると肯定的な意見が80%になった。

- 伝えやすい
- どちらかといえば伝えやすい
- どちらかといえば伝えやすくない
- 伝えやすくない



資料4 「縦のペア、横のペア」で話し合うことで自分の意見を伝えやすくなりましたか。

見が80%になった。「どちらかといえば伝えやすくない」10%、「伝えやすくない」は10%で否定的な意見は20%となり、「意見を言うタイプなので変わらなかった」「苦手」という理由が挙げられ、もともと意見を言っている生徒と苦手意識をもっている生徒が見られた。

## 3 Chromebook を活用した学習の検証

### (1) Chromebook の Jamboard について

Jamboard の付箋機能を活用し、グループ、全体の交流を行った。作成したクラゲチャートの

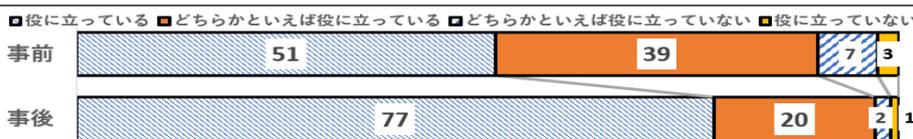


写真3 他のグループを見る様子



写真4 電子黒板で共有する場面

画像を Jamboard の「背景を設定」から読み込み、操作途中で画像が動かないよう固定した。それを授業前に「生徒がファイルを編集できる」を選び配布することで、自分のグループのページで共同作業ができるように



資料5 タブレットは自分の考えを伝えたり、まとめたりするのに役に立っていると思いますか。

した。そうすることで授業の欠席者によりグループ編成が変更になっても対応しやすかった。ただし他のグループのページの作業もでき

るので、他のグループと間違えたり、編集したりしないよう指導する必要がある。写真3のように、他のグループの取り組み状況も見ることができ、授業内でも他のグループを参考に行っている場面も見られた。また、写真4のように、Jamboard を電子黒板に映すことで各グループの進捗状況やどのような意見が出ているのか把握できた。さらに、全体で共有しながらキーワードや、生徒とのやりとりから出てきた意見を書き加えることもでき、フィードバックに生かしやすくなった。

資料5の検証授業後に実施したアンケート「タブレットを使うことで考えを伝えたり、まとめたりするのに役に立っていると思いますか」では、「役に立った」が検証授業前の51%から77%、「どちらかといえば役に立った」と合わせ肯定的な意見が90%から97%と高くなった。「紙よりもタブレットの方が他の人の意見を見て新しい考えを持てた」「書いたことが残るため、自分のタブレットからいろんな意見や自分の意見が繰り返し見られた」「伝えるのもまとめるのも使いやすかった」などの回答が見られ、自分の考えを形成する際、他者の考えと対話するという点で効果を発揮してくれることを実感している結果となった。

## (2) Chromebook のフォームについて

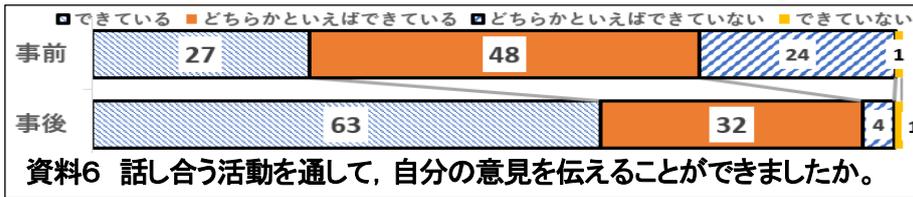
事前・事後アンケートをフォームで作成し、授業前に Classroom で配布して取り組ませることで、回収と同時に集計されてグラフ化され、記述も一覧で表示されるので分析がスムーズに行える。またクラスごとのアンケートはスプレッドシートにすることで、受け持ち四クラスのデータを一つにまとめエクセルで集計することができ、全体的な分析がスムーズにできた。アンケート作成では、記述にすると半角か全角か、漢字か平仮名かなどの表記の違いが結果に影響するので、学級はラジオボタン、番号はプルダウンで選ばせるなど誤差がないよう設問を工夫した。

授業では時間が限られていたので、アンケートは事前と事後の二回に限定した。ただし、Classroomで課題配布する際、課題の下部分にある「クラスのコメント」にその日の振り返りを入力させることで時間を短縮することができ、教師も生徒も送信してきた生徒のコメントからその場で共有することができるので、今後はその活用も取り入れていきたい。

## 4 アンケートから見る意識の変容

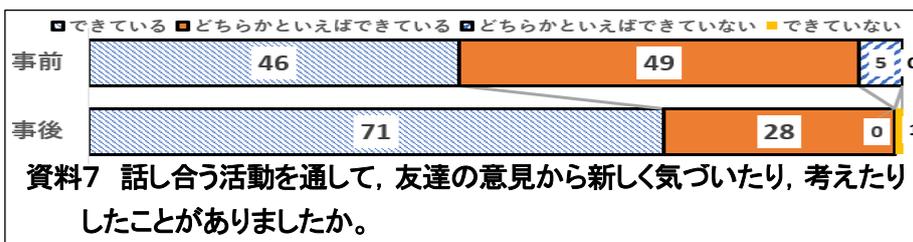
研究仮説が有効であるかを検証するため、検証授業前と検証授業後にアンケートを実施した。

対象は検証授業を実施した4クラスの生徒で、次のような結果となった。



資料6「話し合う活動を通して、自分の意見を伝えることができましたか」では、「できている」が27%から

63%と36%高くなり、「どちらかといえばできている」と合わせると肯定的な意見が75%から95%まで高くなった。「交流が楽しかった」「みんながしっかり聞いてくれた」「自分の意見を役立ててもらったことができた」「ペア学習が積極的にできた」「タブレットで伝えやすくなった、共有しやすくなった」など肯定的な回答が多く得られた。ただし「どちらかといえばできている」と回答した生徒に「自分の意見のすべてを伝えることはできなかった」「意見は言えたがもう少し上手にまとめたい」などの意見も見られ、意欲は高まっているので交流方法を見直していきたい。また「どちらかといえばできていない」「できていない」と回答した生徒に「話す前に終了になった」「グループであまり話せなかった」という記述があり、時間設定や話し合いがうまくいっていないグループへの手立てを検討する必要がある。



資料7「話し合う活動を通して、友達の意見から新しく気づいたり、考えたりしたことがありましたか」の項目でも、「できている」が事前の46%から71%と25%高くなり、「どちらかといえばできている」と合わせると肯定的な意見が事後では99%となり、同様に高い割合に変化している。

る」が事前の46%から71%と25%高くなり、「どちらかといえばできている」と合わせると肯定的な意見が事後では99%となり、同様に高い割合に変化している。

## VI 研究の成果と課題

本研究では、国語科の授業で交流する場面において、クラゲチャートやスリーステップ法、Chromebookを取り入れたことで次のような成果や課題が見られた。

### 1 研究の成果

- ①Chromebookでの交流では、Jamboardで付箋機能とクラゲチャートを組み合わせて活用することによって、Chromebook上でそれぞれの意見を比較したり、まとめたりするための話し合いが活発になった。その際、他のグループの意見もChromebookで閲覧し、参考にする場面も見られた。付箋には名前を入力させることで、教師や他のグループでも誰の意見かがすぐにわかり、フィードバックする際、どうしてそう考えたのか、根拠はどこかなどを本人に確認するのがスムーズだった。また、生徒のアンケートからも意見交流がしやすくなったという回答の数値が高くなり、記述にも多く見られた。
- ②各グループの意見を全体でフィードバックする際、Chromebookや電子黒板を活用することで、今までのホワイトボードでまとめさせる方法よりも時間が省略できた。それにより交流後さらに個で学びを深めていく時間を確保でき、思考の流れがスムーズにできた。また、まとまっていないグループも途中過程が見えるなど、即時画面で共有できた。
- ③スリーステップ法を取り入れることで自分の意見を伝えやすくなったという肯定的な意見の割

合が、生徒のアンケート結果で高くなっており、発表することへの苦手意識が軽減されているような記述が見られた。

## 2 今後の課題と対応策（課題● 対応策◎）

- Chromebook の付箋機能を活用したグループ交流では、意見がでていっているのですぐに話し合いができるが、そのような状況に不慣れなため、スムーズに話し合いに取り組めるような教師からの具体的な指示や話し合いの持ち方を考える必要がある。
  - 各グループの意見を共有する場面では、生徒の意見の共通点や相違点、深めたい点などを教師が見取って意図的に進めたかったが、個々の文章の内容確認に時間がかかってしまった。生徒に説明させ、教師はそれを聞き取りながら少数派の意見や深めたい点などを見取ることで、共有の時間短縮になり、フィードバックやそれを受けての個々の再考に時間を生かすことができると思われる。
  - グループで話し合ったことへのフィードバックを全体で共有している途中でも、グループの意見をまとめようと話したり、タブレット操作をしていたりする生徒が各クラスで見られた。それは全体での共有の場面を「最終のまとめ」だと生徒が認識しているからだと思われる。「フィードバックの共有は途中過程」であり、他の意見を自分の考えに生かすための場だと押さえることで、共有するときに他の意見をしっかり聞き、考える態度につながると考える。そのため、全体で共有する場面を授業の中盤までに行い、新しい気づきを生かせる場面を設定することで、対話が重ねられ深い学びにつながるだろうと考える。
- ◎思考ツールを使い交流しながら考えを深める場面で、電子黒板を活用して比較・焦点化してまとめていく過程のモデルを全体で共有したり、生徒の効果的な活用をした例を提示したりすることで、生徒が活用方法に慣れ、話し合いがスムーズになっていくだろう。また、その場に合う思考ツールを選んだり、組み合わせたりと効果的な方法を探っていきたい。
- ◎交流で授業を終わってしまうと振り返りができなくなるため、「個（ワークシート）→交流（Chromebook）→個（ワークシート）」の流れで取り組ませ、フィードバックを生かした学びの変化が視覚化できるようにすることで主体的で対話的な深い学びにつながるだろうと考える。

### <主な参考文献>

- ・文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編」（2018 年）
- ・石丸憲一編著「Chromebook でつくる中学校国語の授業」（2022 年）
- ・『国語教育』編集部「ICT×国語 GIGAスクールに対応した 1 人台端末の授業づくり 小学校・中学校」（2021 年）
- ・三橋和博「中学校数学科ペア・グループ学習を位置づけた対話型授業」（2019 年）
- ・泰山裕「教室の窓-vol.67 P20（個別最適な学びと協働的な学びの基盤となる思考スキル）」
- ・黒上晴夫「ロイロノート・スクール シンキングツールを学ぶ」（2021 年）

### <主な参考 URL>

- ・文部科学省「GIGA スクール 構想の実現へ」  
([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/other/index\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm))
- ・文部科学省「国語科の指導における ICT の活用について」  
([https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt\\_jogai01-000009772\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_01.pdf))
- ・黒上晴夫、小島亜華里、泰山裕「シンキングツール～考えることを教えたい～」(2012 年公開 短縮版) ([http://ks-lab.net/haruo/thinking\\_tool/short.pdf](http://ks-lab.net/haruo/thinking_tool/short.pdf))